
でも大丈夫、問題なんて何もない。

星沢青嵐

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

でも大丈夫、問題なんて何もない。

【Nコード】

N4458V

【作者名】

星沢青嵐

【あらすじ】

生まれてから不幸な目にばかりあっていた少女が、国家軍に入ってから日常とあらゆる任務、ちょっとしたトラブルをえがいた物語。

ブローグ

神はなんと残酷なものだろう。

私が生まれて早18年。

その間に、私はなんとも言えぬ苦しみを味わった。

それも、何度も何度も。

今現在も、苦しみは続いている。

なぜ私が神は残酷だと思うかというと、私はそれなりに運命に翻弄されたと言っていいからだ。

まだ幼いころに両親が国家に殺され、一人残された私は孤児院で育った。

10歳になるまでは、そこまで不幸でもなかった。

しかし、10歳の誕生日にその孤児院が取り壊され、行き場を失った私たち孤児は、あらゆる場所にばらばらに引き取られた。

それくらいなら、心やさしい私は仕方ないと受け入れ、今ほど神を恨まなかっただろう。

問題はその後だ。

見知らぬ土地に引き取られ、周りになじめずにいた私は、いつしか一人でいることが増え、邪魔者扱いされた。

それからというもの、ありとあらゆる孤児院をたらいまわしにされ、ひとところにとどまることはなくなった。

長くて5カ月、短くて2週間ほどだった。

そういうことがあり、私は神を恨むようになったのだ。
そんな私にも、1度だけ幸せだと思ったことがある。

13歳の誕生日、当時住んでいた孤児院に、私の母方の兄と名乗る男が現れた。

残念ながら、その男は私の叔父ではない。

私には親も兄弟も、親戚も誰一人いない。

両親が国家に殺された後、私の親戚は虐殺されたのだ。

そんなことは全く知らない孤児院の人間共は、厄介払いにちょうどいいと思ったのだろう。

私はその男に引き取られた。

その時だけだ。私が幸せだと感じたのは。

叔父と名乗る男が、何を思って私を引き取ったのか、そもそも、なぜ私を知っているのか、不思議に思ったが、知っても私が得をすることはないだろう。

わざと男を信じたように、私は男をおじさんと呼んだ。

きっと、私がおじさんを信じていないのは、おじさんだってわかっていただろう。

でもまあ、私はおじさんのことはまあまあ好きだったし、おじさんも私を引き取ったぐらいだ。嫌いではなかったはずだ。今までで一番幸せな時期だった。

しかしここで、またも神は私を不幸にした。

おじさんが、殺されたのだった。

私が15歳のころだ。

おじさんと暮らして1年。

犯人は、やはり国家だった。

私がおかしいと思いはじめたのは、この時だった。
同時に、今思い出しても、人生で一番不幸だと感じた瞬間だ。

おじさんが死んで、また私は行き場を失った。

前と違うのは、私はもう一人で生きていけるようになっていたことだ。

そこで私は、おじさんと住んでいた家を出て、安いアパートで暮らし始めた。

私はよく実年齢より上だと思われる。

老け顔という意味ではなく、大人びた顔だとおじさんに言われた。容量もいいほうで、アルバイトをしながら暮らした。

その暮らしも長くは続かなかった。

ある日、役職は忘れたけど国家の偉い人が訪ねてきた。

私にとって、国家は憎い以外の何物でもなかった。

初めは相手にせず、無視していた。

でも残念ながら、粘り強い相手で、私のほうが根負けしてしまっ

た。
その人は、私に国家の軍に入ってほしいといった。
もちろん断った。

しかし、その人は私にこう言った。

「あなたは一般人に混ざって生きるべきではない。

あなたは自分が知らないだけで、特別な人間であり、危険人物です。

軍にいたほうが、あなたのためです」

正直、意味がわからなかった。

でもなぜか妙に納得してしまって、私は軍に入った。

そして今に至る。

よく考えると、おかしいところがいくつもあり、言葉で表せない苦しみも多い。

軍に入ってから、私の不運は変わらない。

私が軍に入ってから、の出来事を、ここに残そうと思う。

第1戦 「イミワカンネ」byアザミ

「うん、イミワカンネ」

軍とか正直どうでもいい。なのになぜ私が無駄に大きい軍用地についていうの？まあよく分からないけどそういう場所の前にいるかと言うと、意味の分からない国家の偉い人が軍に入れと言ったからだ。うん、説明下手だ。自分の文章力の無さが分かる。

「てか、どーしたらいいんだ・・・」

かれこれ30分ほどこの場所から動いていない。たったの1歩もここにいてもなにもはじまらない事はよく分かっているんだけど・・・。

すべてここに連れてきた『神田』って人のせいだ。

そうだ。そいつのせいだ。

軍に入る準備ができたから、って一般人なら一生かけなくてもいいような電話かけたらその『神田』って人がでて「じゃあ明日俺がむかえにいくよ」なんて優しそうに言ったくせにこんな場所で車から降りしやがって。

だいたいこつからどう動けばいいのか分かんないよ。分かる人はどうか私に教えてくれ。

どんどんイライラしてきた。

「あつれ〜？もしかして、『アザミ』ちゃん？」

後ろから男の声。

だれだ貴様。

そう言おうとしてやめた。私の名前、『アザミ』という心底嫌いな名を呼ぶ、というか知ってるのは私の知らない人だと軍の人だろう。

とりあえず最上級の営業スマイルをうかべ、振り向く。

「あの、軍の方ですか？」

「え・・・あ、そうだよ」

その間はなんだ。

トラックに乗ったその人は、『軍人』という言葉がまったく似合わない青年だった。

俗に言う『イケメン』という言葉の方がよく似合う。まあ私はそんなの興味ないからどうでもいいけど。

「よかった。『神田』さんにここまで連れてきてもらったんですけど、ここからどう行けばいいのかわからなくて。

あ、自己紹介がまだでしたね。私は柳瀬アザミと申します」

「それなら、俺が連れてくよ。話は聞いているし。」

俺は国立カイト。よろしくね」

「よろしくお願いします」

「そうだ、俺の声、ちゃんと男の声に聞こえる？」

「聞こえ・・・ますけど」

「よかったー！よく女声してるって言われるんだよね」

「そうなんですか？」

「みんなそう言うんだよ。だから、はじめて会う人には低めの声をだしてしゃべるようにしてるんだ。まあ長くは低く出せないからいずれ普通にしゃべるようにするんだけどね」

「へー・・・」

うん、案外いい人だ。
しかも面白い。

「じゃあ、行こうか」
「はい」

國立さんは普通に話せるような知り合いになれるかもしれない。

第1戦 「イミワカンネ」byアザミ（後書き）

…よくわかんなくなってきた。はじめなのに。

第2戦 「ああ、知ってるのか・・・」 by アザミ

あのさ、驚いたんだけど、軍って私のイメージでは男ばっかのイメージだったんだけど、けっこーいるね女の人。

ああごめん。説明をしてなかった。

国立さんが敷地内に連れてってくれて、今に至るんだけど・・・。

面倒なんで回想スタート

「さて、アザミちゃん、みんなを呼んでくるからちょっと待ってて」

また待たされるのか。

神は私を待たせるのが好きなのかそーかそーか。

というワケで待ってた。いつまでも待ちますよ私は。なれてますんで。今まで生きてきた人生の半分は何かを待ってるからね私は。

そんな事はおいといて。

なんか結構（かなり）広い部屋にいます。広い。うん、それしか言えん。

現状を話そうかなって思ったけどやめた。やっぱり私文章力ない。

一人でぼんやりしていると国立さん与其他大勢の人が来た。

私が思った事は一つ。

「女の人多いな・・・」

頑張つて自分にしか聞こえない声で言つたよもちろん。

・・・というわけで、自己紹介をしようということになった。私から。

正直自己紹介は苦手なんだが・・・仕方ない。

やっぱり営業スマイルで。

「柳瀬アザミです。よろしくお願いします。」

あーあと、『アザミ』の花言葉を知ってますか？」

最後の重要。できれば知らないでほしい。

「・・・知ってる。・・・『アザミ』は・・・『独立』・・・『厳格』・・・『復讐』・・・『触れないで』・・・だよね・・・」

最悪だ。知ってるなんて。

てか知ってるのはいいとして、私より年下だよね？あの人。女の子。え？なんで知ってるの？なんで軍にいるの？

「・・・あつてる？」

「えっあああつてますよあつてましゅ！・・・噛んだし！」

「・・・噛んだ・・・ね」

「そんなに動揺するって・・・面白いね」

ん？今なんか聞こえたぞ。女の人の声だ。でもなんか聞いたことがある声・・・って国立さん！？

「こ、ここここ国立さん！？」

「なにその驚き方！こっちが驚くよ！」

「い、いや、ほんとに国立さんって女の人みたいな声してるなって・・・」

「ああ、初めてこの声聞く人はたいてい驚くんだ」

「でしょうね・・・綺麗な声ですし」

うん、いままで聞いた事がないくらい綺麗な声だ。自分が女である意味が分からなくなる。

「あゝ、ハナシずれてるよ。さつさと次いかんかい！」

「ひいひい！ごめんなさい！ごめんなさい彩夏さん！」

誰ですか。誰なんですか。あなたは。

国立さんめっちゃ怯えてるし。え、女の人ですよ？

笑ってるけど、男の人みたいな気迫があるよ？あ、こっち見た。

「ごめんねえ。こいつバカでさ。あたしは来羅彩夏。よろしくね」

「よ、よろしくお願いします」

「ははッ！そんなに怯えないで」

「すっすみませっ」

「あやまらない」

「ごめんなさつ・・・ああまちがっ・・・すいませつ・・・えええええ！？」

「ほんと面白い子だねえ」

第3戦 「いや、そんなこと言われましても」byアザミ

長い長い自己紹介が終わりまして（いやとばしすぎとか言わないであげて。てか言わないでお願い本気で。説明下手だから説明したくないんだ）まあだいたいの人の名前は覚えた。

「だいたいつてなんだ」って思った人いるよね。絶対。

昔から私の脳は興味のないものは一切記憶に残らないようになってるのです。

とはいえ、覚えてないと色々大変だろうからできるだけ覚えた。

因みにアザミの花言葉知ってた子は雅鈴^{みやびすす}って言って、12歳で、10歳からここにいらっしゃるらしい。

あのあと、来羅さんと國立さんにこの軍について教えてもらった。全く説明受けてなかったから正直分かりづらかった。

でも私の記憶力だから覚えられないのでメモとったけど。

そのメモが

- ・この軍は『異能者』たちが集まってできている。
- ・『異能者』は何歳でもここに連れてこられる。
- ・ここににいる人たちは多くの問題――（？）をかかえている。
- ・活動はおもに2人ペアでの任務になる。
- ・任務は暗殺などのあまり目立たないもの。

疑問があまりにも多かったので、2つだけ質問するところう答えがかえってきた。

まず、『異能者』とは何か。それはそのままの意味らしい。『普通の人間にはない能力』だと。よく分かんないけど。

で、『多くの問題』とは何か。「まあ、いろいろ？」との答え。

なんだそれ。

そんな感じで初日は終わった。

私がここにいるという事は私にも何らかの能力があるだろう。
その能力は何なのかわからないけど、まあ何とかなるだろう。

国立カイトの日記帳 Ⅰ

4月7日 「新人が来た」

今日はいつもと違って新人が来た。

アザミちゃんって子で、つい昨日まで一般人だった。

両親が早くに死んでしまって孤児院で育ったらしい。

俺と同じだ。

俺も両親が死んで孤児院で育ったから、一気に親近感がわいたよ！うん。

明るくて、ころころ表情が変わっておもしろい子だったから、ここでも皆と仲良くやっていけると思う。

あまりにも営業スマイルに馴れているようでちょっと怖かったけど。

ここに来る前に一切説明を受けていなかったらしく、彩夏さんと説明してあげた。

アザミちゃん曰く、「自分は記憶力が悪いから、メモしないといけない」らしい。苦笑いしてたから本当だと思うけど、メモの書き方が簡潔でわかりやすかった。文章力がハンパないことが発覚。

説明が終わったあとも、あんまり分からなかったようで質問してきた。無理もない。

アザミちゃんにはいつてないけど、彩夏さんから「アザミが馴れるまであんたがペアね」って言われた。

なんで俺が！？って思いはしたけど、アザミちゃんは見た通りでは努力して馴れようとしてくれるだろうから承諾した。

でも、アザミちゃんは自分の能力が何か分かってないから、まず自覚させないといけない。俺にそれができるのだろうか。

実はなんか嫌な予感がするんだよね。

なんかこう……。あれ……。そう、大変な任務が入ってくると思う。

俺が感じてるから、多分当たってる。

鈴も薊の花言葉ですごい反応したアザミちゃんを見てなんか感じたようだったし……。

とりあえず今日は寝る。考えててもなにも分からないし。

以上。

第4戦 「おいまてなんだそれ」b yアザミ

「修行……ですか」

「うん。能力開発っていうのかな？」

「こっちに訊かないでください。」

朝起きると、國立さんと来羅さんにつかまって、なぜかこんな話に。

「いや、あの、拒否はしませんけど……とりあえず、どういう事を……」
「基本的に体力をつける！」

それは能力といっても身体能力のほうでは……？

「カイトの話は無視して。前も言ったけど、こいつ馬鹿だから」
「はあ……」

「アザミちゃん、否定はしてくれよ……」

「そんな声で言われても可愛いとは思えませんよ、國立さん」
「… 案外毒舌かもしれないなー、アザミちゃんは」

思ったことを言っただけなんです。

「さて、話すよ。よく聞きな」

「はい」

「能力は人それぞれだったのは話したよな。修行ってのは、体力をつけるのもあるが、おもに色々と試すんだ」

「試す…とは？」

「能力にはそいつの個性がでる。趣味が能力だったり、特技が能力だったっていう事が殆どだ。まあ、その逆もあるけど」

ということとは…色んなことさせられるってことか。たとえ拒否しても。

「そういうことなら、できるだけ頑張ろうと思います」

「できるだけなんだね」

「え、それ以上に頑張れと？」

「……申し訳ありません」

「な、なんで謝るんですか!？」

「ごめんなさい」

「やめてくださいッ!」

國立さん面白いけどなんか怖いな…。

「あたしとカイトでサポートするけど、やる気がないと多分能力目覚めないからさ、しっかりね」

「多分…ですか。頑張りますよ、一応」

「多分としか言いようがないんだよ。あたしは物心ついたところから能力あつたし、カイトは死にかけてからしか目覚めなかつたし。他の奴らも、ここに来たころには、もう能力目覚めてたんだよ」

「私だけですか…」

「大丈夫大丈夫。もしかしたら気づいてないだけで、目覚めてるかもしれないでしょ」

…フォローされてるのか?これは。

「明日からだから、動きやすい格好できて」

「あ、はい」

これは覚えとかないとなあ。私の脳フルで動け。

第4戦 「おいまてなんだそれ」b yアザミ（後書き）

書き方が変わったかもしれません。

前はここまでセリフばっかじゃなかった気が…

第5戦 「ちょ…それはないでしょう!」byアザミ

「あのー……動きやすい服って……これでいいんですかね?」

昨日言われたことをしっかり覚えていた私は、白のタンクトップと黒のショートパンツという超薄着で来てみたのだが……。

これでいいのか?と私の心の中で誰かが言っているのとおりあえず國立さんに訊きにきた。

「おっけー!全然おっけー!いいよ!うん!」

なんなんだその反応。

「いいって……これでいいんですね?」

「うん!いやーかわいいよ!」

「ヤメテ下さい」

「酷いなあ…むう……」

「國立さんそれ可愛いだけですって」

「俺は可愛くなくていいんだよお…可愛いのはアザミちゃ…」

「今ここで殺しますよ」

「いやああ!殺人予告されたああー!」

「本気だと思いますか?」

「全然」

「なら変な反応はヤメテ下さい」

「はーい」

どっちが先輩なんだか。

「一体何するんですか?」

「んー……とりあえず一緒に軍用地30周走ろうか」

30周!?あの広さを!?ありえないでしょう!てか国立さんは走れるんですか!?

そう言おうと思ったが、ぐっところえて静かに声に出した。

「それは常人の私にもできることでしょうか?」

うん、なかなか普通じゃないか。

「できるよー。きつと」

きつと!?きつとで走らせるんですか!

「こらこら。声に出てるぞ」

「あ……」

「ほんつと可愛いなーアザミちゃんは」

「知りませんよ!この際だから言いますけど、30周とか無理ですつて!」

「走れる走れる」

「私が無理です!」

「え……大丈夫だつて」

「絶対途中で倒れます!脱水症状起こします!」

「大丈夫!その時は俺が口移しで水飲ませてあげ……」

「ふざけるなあー!……!……!」

「……チッ」

「チッじゃないでしょう!」

「まあまあ。やってみるだけやってみよう」

「……わかりましたよー」

根気負け。國立さんはちよつと頭がアレだ。
移動しながら考えよう。できるだけ死なないようにする方法を。

第6戦 「死ぬっ・・・これ死ぬ！」 byアザミ

「さーで、走りますか！」

「はい……」

結局死なないですみそうな方法は見つからなかった。
てかなんて生き生きとした顔してるんだ國立さんは！

「よーい……」

そうやって始めるんだ。

「スター…とっ！」

なんだその言い方アア！！！！

私は体力の無駄な消費をしないために叫ばなかった。

走るのは、嫌いじゃない。

風が私の頬を撫でて、私自身風になっているように心地よい気分になれる。

それが、好きだった。

だった、というのは今はそうじゃないから。

かなり前のことになるが、私は結構足が速いと有名で、唯一の楽

しみだった。

でも、ある日それがつらいと感じた。

周囲の人たちがそれしか能がないと言ったからだ。

楽しんでるだけと言っても、心のどこかで褒めてもらいたいという気持ちがあったのだろう。

「まあ、過ぎたことだからもういいんだけどね」

「え、何？」

声に出してしまったみたいだ。

最近、なんか変だ。

「何でもありません。昔のことを思い出ただけですから」

「ふうん……でもさ、走りながら別のことを考えられるって、凄いことだよ？」

「え、普通じゃないですか？」

「疑問形に疑問形に返すんだ」

それ自分に言ったらどうでしょうか。

「アザミちゃんさ、実は体力あるほうでしょ」

「……そんなことないですよ」

「今15周目だけど」

「普通じゃないですか？」

「普通ではないよ。それに、嫌がってたのに、とっても楽しそうだよ」

「……………」

まだ、楽しいと思えていたのだろうか。

感情を殺し、自分を殺して生きていたのに、ここに来てから少し

違ってきた。

私とおなじように生きてきた人たちがいるからだろうか。

「よし！もうちょっとだ！頑張ろう！」

「なんでそんなに元気なんですかああ！！！！？？？？」

第7戦 「一応女やってますが」b yアザミ

「ちょ…これッ…毎日ですかッ…？」

「そーだよ」

「ない！これは毎日やったら死にますっ！」

「俺毎日やってたもん」

「あなたは男でしょー！ー！！…？…？」

だめだ。国立さんに何言っても無駄だ。
とりあえず、深呼吸…

「さて次はー…」

「まだあるんですか！？」

「うん」

「平然と言わないで下さいよおー！ー！！…？…？」

「アザミちゃん…」

「な、何ですか？」

「叫べる元気あるじゃん」

「そこつつこまないで下さい！」

「えー…」

結局30周のはずが国立さんの気分で50周になったし、私一回
転んだし。

ついていけたこと自体に驚愕してる自分もいるんだけど。

「…次はなにするんですか？」

「うーん…勉強でもしようか？」

「いや、質問してるのこっちですから」

「じゃあ銃の使い方教えよう」

「結局勉強じゃないんですか」

「だって俺勉強嫌いだもん」

「そーですかー……」

なにがしたいのかわからん。

國立さんは体力魔人か。

「とりあえず銃撃練習場に行こう！」

「はい……」

もう無駄なことは喋らないことにする。

「ここ……ですか」

「古めかしいのがちよつとねー……でもまあ今でも使ってるから」

確かに古い。大きな建物のなかには3分の1くらいから壁で区切られてて、あちこちに穴だらけの的らしきものが落ちてる。

「まずこれー……はい」

渡されたのは小型銃。見たことない型だ。

「これってどいう型ですか？見たことないです」

「型は彩夏さんのオリジナルー。あの人銃器いじるのが好きだから」

「だから普通のライフルの基本形ともちよつと違うんですねー…」

「ん？アザミちゃん銃について詳しいの？」

「ああ、趣味でちよつと。モデルガンとかエアガンとか持ってたし
たし」

「ふーん…思ったんだけどアザミちゃん本当に女の子？」

「一応生まれてこのかた女やってますけど」

「だよー」

だよー、ってなんだ。

悪いか銃好きで。

「だよー、こんなに可愛い男がいてたまるかって話だよー」

なんか言ってるよこの人ー！！！！

「…さつさと始めましょう」

「うん！」

だからなんでそんなに元気なんだ。

第8戦 「おお・・・さすが！とか言つかよオオ！！」byアザミ

ズダァァン！！

「…うるさっ」

分かつてはいたんだけど、銃は発砲音がうるさい。
耳を塞いではいるものの、さすがにそんなもので音は消えない。
消えるはずがない。

ていうか何で國立さんはヘッドフォンをつけているんだ！いや本来はそうするんだろうけど！なぜ……もーいいや。さっき走った疲れがまだとれていないんだ。

…國立さん流石だな。的に全部当たってる。中心に。

「よっしゃ全制覇！」

子供みたいな笑顔を浮かべる國立さん。本気でその体力を私に半分でいいので下さい。お願いですから。

「凄いですねー。さすがに上手い」

「なんか反応が冷たい気が…」

「そうですか？」

「俺的冷たい」

「まあ耳イタイんであんまり聞こえないんですが」

「…ということは何？冷たいって言ったのも聞こえてない？」

無視をかましてみたら國立さんはしゅん…としてまるで犬のようだった。…犬だった。尻尾とみみが見えた。

「アザミちゃんもやってみて」
「はい」

とりあえず持たせてもらう。モデルガンより当たり前だが重い。
ずしりと疲れきった腕に痛みが走る。痛い、というよりは痺れるよ
うなものだ。

「く…そっ!」

「あれ、痛いの?」

「当たり前じゃないですか!私一回こけたんですよ!」?

「あーそっか…ごめんね」

「いや謝られる筋合いはないんですけども…」

構えて、ゆっくりしゃがんで、大丈夫だというかわりに微笑んで
みせる。

なんでここまで私がしないとイケないんだ。

「よし、そのまま固定して…そう、そのまま引き金を引いて…ズダ
アアンと!」

「いや、音をあらわさなくていいです!」

——ズダアアアン!!!

私が撃った弾は的の中心の少し下。

「ち…」

「舌打ちしなくても…」

「外したんですからしたくもなるでしょう」

「あのさ、普通は的にもあたらないよ?」

「それでも外したのには変わりないです」

「…上手だから。てか腕痛くないの？」

あ。忘れてた。

「いったあ……」

痛いんだった。

「今日はここまでにして！みんなのところに行こうか！」
「はい……」

やっぱり元気だなこの人。
とりあえず、風呂に入りたい……

第9戦 「え、あの・・・」 b y アザミ

「つつかれた……」

シャワーを浴びて、ベッドに倒れこむ。

「ああ…このまま寝たい……」

いや、寝るわけにはいかない。来羅さんに呼ばれてるんだっ…。

「……行くしかないかあ……」

起き上がって、部屋から出る。長い廊下を歩かなければならないとは拷問だ。足は動かんぞ。すでに足は死んでるんだ。

まあ根性で歩く。根性ならあるから。やる気はないけど。

確か食堂に来ていつて言ってたな。何のためにかは分からないけどさ、そこに来いつて。

でもよかった。ここから結構近い方だし、会議室とか言われるよりマシだ。会議室は走っても10分はかかるから。

色々考えてたら着いた。凄いな考え事って。無意識に歩き続けることができる。次からこうしよう。

「……あ」

鈴って子がいた。その他にも沢山いた。来羅さんももちろんいた。國立さんまでいた。

「鈴さんこんにちは」

「…アザミさん…こんにちは」

「アザミでいいですよ」

「じゃあ…鈴も…ずっと呼んで」

笑顔が可愛い子だ。なんかこう……ギュッてしたい。

「おつかれ、アザミ」

「来羅さん…國立さんどうかして下さい」

「何かあったのかい？」

「敷地50周走らせられました」

「はっはー。よく死ななかつたね」

「いや、それ私も不思議なんですよ。何ででしょうね？」

「体力も能力の1つかねえ…」

「え、そんな能力…アリですか」

「あっても損はしないからね」

確かに損はしないけど…って話変わってる！

「國立さんどうかして下さいホントに殺されます」

「殺しはしないよ！？」

「國立さんは黙って」

「ひどっ！！」

「コイツは馬鹿だからねー…加減つてものを知らないから」

「彩夏さん！？」

「加減どころか…人をボロ雑巾のように引きずるっていつか…へとへとなのに走らせましたからね」

「自分のことボロ雑巾って言った！？」

「そうだな…明日はあたしも特に用事はないから、あたしが訓練し

「やるよ」

「え、俺は!？」

「ホントですか!やった!嬉しいなあ……」

「俺は!？」

ことごとく無視してやった。でも本気で来羅さんに訓練付き合ってもらったのは嬉しい。強いらしいし銃好きらしいし……とにかく嬉しい!

明日が楽しみになってきた。

第10戦 「どうにも笑えないよ…」byアザミ

「ところで、どうだい？この暮らしは」

「特に不満はありませんし、みなさんお優しいのでとても楽しいです。孤児院なんかクソですね」

「それならいいんだ」

なんか来羅さんの話し方って古臭いっていつかなんというか…老人っぽい。

綺麗な人だし、若いし、頭いいし。ここの責任者らしい。凄いなー尊敬する。

「…ちよつと！アザミちゃん！..」

いきなり國立さんが言った。脅かさないで下さい頼みますから。

「クソとか言っちゃダメ！可愛くないし女の子が言っちゃダメ！！..」

「そんなの私の勝手じゃないですか」

「勝手でも！可愛くない！」

「可愛くなくていいですから」

「よくない！！..孤児院、そんなに嫌だったんだね」

トーンが下がった！？いきなりな人だなオイ。

「..嫌でしたよ。大嫌いな場所でした。今はもうどうでもいいんですか」

「そっか..俺も、嫌だったな。一緒だね！」

笑っているけど、國立さんはどこか悲しそうだ。今にも泣きそうなのを我慢してるみたい。

「國立さんも、孤児院で？」

「うん。きつちり18までいたんだあ。つらかったな、あの時は。まあ18になったら即軍に引き取られたんだけどね」

「そう…ですか」

「凄かったよーあの時は。嫌がらせの毎日」

「笑い事ですか」

「笑い事だよ。もう関係ないんだから」

そうか。私と一緒になんだ。

「それに、鈴もだしね」

「鈴ちゃんも孤児院にいたんですか…」

「そう。一昨年に軍にきたんだ」

「へえ…」

「ここにいる人たちは孤児院にいたっていう人多いよ。生まれつき能力があつたりしたからね」

「大変だったんですね」

てかこの国にどんだけダメな孤児院多いんだ。あり得ないだろ、常識的に。こちらと親いないのに少しくらい優しく接してやれんのか。

私はいい、感情の起伏があまりないから。でも國立さんや鈴ちゃんたちには優しくしろ。

新たな目標として、軍のひとたちには優しくしよう。出来るだけ。

国立カイトの日記帳 Ⅱ

4月18日 「修行」

今日からアザミちゃんの修行が始まった。

まず軍地50周して、そのあと銃をちよつとさわって、終わり。
50周走れるとは思わなかったんだけど……アザミちゃん体力スゴくあった。

一回転んだけど（笑）転び方がかわいかった……。

銃が好きっていうのは意外だったな…好きなものとか興味あるものとか無さそうだったから。銃についても詳しくかったし。彩夏さんと話合いそうだ。

毒舌だったのは想定内。自分の心の中で色々考えてそんな顔してるし、何より間違った事を言うことはナイ。

でも俺の扱いヒドいよ……

孤児院にいたときはつらい毎日をおくっていたようだ。

鈴が孤児院にいた、って言ったらちよつと怒ってた。ホント優しいコだ。ますます可愛い。

明日は彩夏さんがアザミちゃんの修行に付き合つらしい。訓練って言うてただけ。

俺もついていこうと思うから、今日はもう寝ることにする。

あのひとスパルタだからな……………

第11戦 「銃！じゅうー！」 byアザミ

「さて、あたしは走んの嫌いだからね。まず2周走って来な」

「はい」

「はいよー」

来羅さんと國立さんと私で今日は訓練。走るの嫌いって、絶対嫌いなだけで体力あつて速いよね、絶対。

走っていると、なんか知らないけど、國立さんが「あああああああ」とか「ふあああああああ」とかよくわからないことを言っていた。全部スルーした。

昨日と比べたら2周なんて楽。超楽。気づいたら終わってた。

で、昨日行った銃撃練習場に行つて、またも國立さんのど真ん中弾を見せつけられて、来羅さんの番。

「カイトなんかに負けないからな」

「さつさと負けて下さいよ彩夏さん」

「にこやかに言うなにこやかに」

「それを言うならそつちもでしょう？」

「はっはっはー。これが笑わないでいられるか」

「それもそうですね」

……なんですかこの二人。銃持つてにらみ合ってるよ。本当に仲間か？

火花が散っているように見えるのは私だけか…？

「あたしオリジナルなめんじゃないよ！」

——ズダアアアン！！

もちろん中心に当たった。

「さすがです！来羅さん！」

「アザミちゃん！？俺のとき言わなかったよね！！??」

國立さんのときは言いませんでしたよ。だってなんかイラつときから。

「教えて下さい！どーしたらそんなに上手くなりますか!？」

「的をよく見て、集中しな。銃は重みがあるから全身に力を入れて支えるんだよ」

そう言つて、自らその体勢をとつて見せてくれた。マネしながら体勢整えて、的をみて集中し、撃つ。

すると、中心に当たった。

「ふお！？当たった!!」

「ふおつてなにふおつて!!??」

「國立さん黙つて」

「ヒドイよ!!」

「来羅さん、これなんですか？奇跡ですか？」

「奇跡はない。まぐれつてことはあると思うけどね」

「私…もつと頑張ります！」

決意表明。銃撃練習頑張る。

第12戦 「能力・・・かぁ」 byアザミ

「ふと思っただんですけど、来羅さんの能力は何ですか？」

銃を扱う訓練をして、今はご飯を食べている。

余談。この食堂のご飯は、美味しいです。

「ん？あたし？あたしは『創造』だよ」

「創造…ですかぁ」

「何も無いところから物を創り出す。それが創造。ま、さっきのオリジナルの銃はもとからあるヤツにちよつとだけ手え加えただけだね」

あの外装はちよつとの改造と言えるのでしょうか？
声に出ていない事を願う。

「何も無いところ、ってのは？」

「まあ見てな」

そう言っただけ来羅さんは右の掌をひらいた。

そして、掌の周りに細い稲妻（？）のようなものが纏わりついて、ぐつと握りしめると、バチツと光で掌が見えなくなった。

「ほら、こんな感じで」

光が収まると、来羅さんの掌に握りしめられていたのは、四角いプレートと鍵のモチーフがついた金色のペンダント。

「…すい」

「これくらい、なんともないさ。アザミだってできるようになるかもしれないよ」

「マジですか」

できたらすごいなー。やってみたい気もするけどねえ。稲妻にまわりつかれるってのは…ちょっと。

「あげるよ」

「え、いいんですか？」

「そのために創ったからね。アザミに似合うだろうと思ってさ。ほら、あんた化粧もアクセサリーの類も一切付けないからさ、シンプルなもの絶対似合うのに、勿体ない」

「いやー、化粧とかアクセサリー付けないのは来羅さんも一緒じゃないですかあ」

いいんだよあたしは、と来羅さんは言って、私の首にかけてくれた。

こういうものを貰ったことないからなあ。ちょっと嬉しい。ちょっと、てかとっても嬉しい。

「一生…大切にします…!」

「大げさな」

本気で大切にしますからああ!!

「ところでさ、アザミちゃん」

すっかりのけものにされていた國立さんが、唐突に言ってきた。

「俺のこと忘れてない？」

「忘れてました」

「にこやかに言うなよ…」

あ、さすがにひどかったか。

「國立さんの能力って何ですか？」

「俺？俺は『超人的身体能力』と『回復能力』だよ」

「ふえー。やつぱすごいですね。流石國立さん。50周走る人」

「え、根に持つてる？」

「いいえー」

ホントは根に持つてるんだけどね。

國立さんはいいひとだから怒りが半減しているだけですよ。

「國立さんも来羅さんも、私にとってあこがれのひとですよ」

「嬉しいことをいつてくれるねえ」

「俺も！？やったああああ！！」

「だって私、こんなに優しくされたことありませんもん」

ホントですからねー？

でも、あんまりこんなことは言わない。恥ずかしいから。

国立カイトの日記帳 3

4月19日 「彩夏さんと」

訓練があつた。俺は「修行」って言ったんだけど、「訓練」って
言わないと駄目だつて。アザミちゃんが。

今日の彩夏さんはめっさ優しくかった。いつもはスパルタなのに！
！俺の扱い酷いのに！

アザミちゃんって人当たりのいい毒舌キャラだから、結構基地の
中でも人気あるんだよね。俺の扱い酷いのだね。

ホント…みんな俺の扱い酷いよ…

恨みでもあるのかな…

俺なんかしたかな…

訓練では、彩夏さんがアザミちゃんに銃の扱いかたを教えていた。
そんで、なぜか俺の扱い方も教えていた。なぜだろうね。

しかも…なぜか説明書とやらを創造していた。あの人はなにがし
たいんだろうね。

最後に…

アザミちゃんにあこがれの人っていわれたのは嬉しかった――

――！！！！

第13戦 「空気」byアザミ

この軍に入って、1か月ほどたった。

もうすっかり慣れて、訓練も初めはきつかったけど今は「ああ、ゆるいな」って思うくらいになった。

多分洗脳されてる。

さて、5月も中盤に突入して、今年はちょっと早い梅雨の予感。

雨のおいがするようになってきてじめじめする日も多くなってきた。においするって言ったら国立さんに驚かれたけど。鈴ちゃんは頷いてくれた。ホント可愛いよね鈴ちゃん。

実際雨降りの日が多くなっているのは事実で、来羅さんの機嫌が悪い。

雨が嫌いなのだと。

今日も朝から雨が降っていて、外でなんにもできないからみんなで屋内で遊ぶらしい。

無論、私は遊びに興味が無い。だが、鈴ちゃんが来てと言っていたから行く！

集合場所の大広間に行くと、すでにみんなが集まっていた。くそ、出遅れたか…？

「アザミちゃん！こっち」

「国立さん、ちゃん付けはやめてと言ったはずですよ」

「やだ」

「なぜ？」

「可愛いから」

「よし、そういうことなら来羅さんに頼みます」

「ごめんなさいアザミ様！」

様ってなんだ。

相変わらずの女声。いつでもどこでも女声。最近はもう日常風景に溶け込んで、いわば空気のような存在になっている、国立さん。

「全員集まったね」

来羅さんのカッコいい声。この軍には個性的な声の持ち主が多いな。ってみんなと話して分かった。

「今日は雨だから室内で遊ぶ。みんなで鬼ごっこだ！」

鬼ごっこですか。なんとも懐かしい。子供の頃にやったアレですよね？

「ただし！ここはやっぱり特殊軍だからね。オリジナリティってやつを出してみた。」

カイト、ルール説明！」

「いえっさ！只今よりこの国立カイトが説明させて頂きます！」

あれ？今日みんなテンション高いぞ。ついていけないのは私だけ？鈴ちゃんも楽しそうにしてるし。なんでこんなに鬼ごっこでテンションあがるの？

「ルールは簡単！2人一組に分かれてその中から一組が鬼となります！」

ペアはくじでランダムに決めますので、文句言っなら彩夏さんに言って！

あと、逃げる時には武器アリだよ！逃げるためなら相手を傷つけない程度に攻撃してよし！

制限時間は4時間！最後に鬼になったペアの中の一人には罰ゲームを受けていただきます！事前にアンケートを取った中からくじできめるよ！」

ああそっか、このあいだ國立さんが「やられて嫌な事ってなに？」って聞いて回ってたのはこの事だったのか。

確か私は紙に「コスプレ」って書いたはず。

「さあペアを決めるよ！あくまで公正にするためのくじだからね！誰とペアになってもあたしに文句は言わないようにな！」

うわ、國立さんが言った事覆した。さすが来羅さん。そうしてペア決めが始まった。

第14戦 「それは断固として拒否させて頂きます」b yアザミ

ペア決めは結構な時間がかかった。

なにせ隊員全員参加だもんね。そりゃ時間かかるよ。
で、私は誰とペアかというと……

「アザミちゃん！俺とペアね！」

國立さんでした。

畜生、鈴ちゃんとペアが良かった。まあ、鈴ちゃんは来羅さんだからね、我慢しよう。

「國立さん、足手まといにだけはならないで下さいね」

「笑顔でそんなこと言わないでよ……。大丈夫、俺体力には自信があるからさ」

そっか、この人体力魔人だった。

それならいいかな。捕まらなければそれでいいや。
特に興味はないから。

「さてと、全員ペア居るよな？居ない奴は手え上げてー。はい居ないね」

なんですか國立さんそのちょっと強引な……言葉？

まあ別にどうでもいいけど。みんなさっさと始めたいみたいだしね。

「よし！じゃあ最初の鬼は彩夏さんと鈴だからねー。みんな逃げんだよー。」

これから15分後に彩夏さんたちが放送入れるから、そのときから鬼ごっこ開始だよ！」

初めて聞きましたそれ。私だけですか、説明なかったの。

國立さんがそう言ったのを聞くと、みんな大広間からぞろぞろと出て行った。混んでるねえ、出入り口。二つあるのにどっちも混んでるよ。みんな逃げたいのね。

「アザミちゃん！俺たちも逃げよう！」

「…どこから？」

「ん！」

國立さんが指差したのは、

「窓からに決まってるじゃん！」

まさかの窓でした。

『はい15分たったよー。今から捕まえに行くから覚悟してな!』

来羅さんから放送が入ったのは、大広間を窓からぬけて女性寮と男性寮をつなぐ渡り廊下を歩いていたときだった。

てか来羅さんの放送には気だるそうなのと殺気が見え隠れしてた。怖かった。超。

「アザミちゃんアザミちゃん!」

「はい何ですか国立さん」

「…怒ってる?」

「怒ってませんよー」

「よかった!」

何が良かったんだか。どっから怒ってるかってのが来たのもよく分からんけど。

…やっぱり生き生きとした表情を浮かべているな。なんでだ。そんなに楽しいのか、この鬼ごっこは。

「あのさ、どっかに隠れるのが一番得策かとおもうんだ!」

「そーですねー…。てかなぜに女性寮に向かっているのでしょうか」

「女性寮って、食堂から近いし男性寮にも逃げれるからいいかなって。それにアザミちゃん男性寮に足踏み入れたくないでしょ?」

「まあ…何も無い時に入りたくないですけど…」

女性寮に男である国立さんが入るのも何だと思うんだ!私は!

声に出てませんよーに。

「…決めた!」

「何を?」

「隠れる場所！」

「どこですか？」

「アザミちゃんの部屋！」

やっぱりそうですか。

嫌な予感がしてはいたんだけどね。

「それは却下です」

「ええー」

そんな顔されても知らねえよ。

私の部屋に國立さんが入るとかありえん。嫌だ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4458v/>

でも大丈夫、問題なんて何もない。

2011年11月25日23時48分発行